

放課後は、異世界喫茶でコーヒーを

風見鶏



ファンタジア文庫

2581

目次

プロローグ

- 一 「生ハムとチーズのホットサンド、温泉卵を添えて」
 - 二 「悪魔の実のスパゲティ」
 - 三 「雨の日のお弁当」
 - 幕間 「放課後はコーヒーを」
 - 四 「トマトと彩りキノコの煮込みハンバーグ」
 - 五 「眠れない夜に」
 - 六 「彼女のいない喫茶店」
 - 七 「誰かの帰る場所」
- エピソード

5
13
40
73
119
136
163
203
228
263
281

プロローグ

人生には安らぎが必要だ。

「安らぎというのはつまり、誰にも遠慮することなく、誰にも邪魔されず、ただ満ち足りている時間のことだ。」

たとえば、僕にとつての心の安らぎとは、こうしてグラスを磨くことだ。

洗い立てのグラスには水滴が付いている。清潔な布巾でグラスを掴み上げ、水滴を拭う。グラスの縁、お客さんの唇に触れる部分は念入りに磨く。最後に全体を仕上げるように拭き上げれば、指紋も汚れもない芸術品が生まれる。

それを光にかざして眺める。惚れ惚れする。これこそがまさに、安らぎだ。

磨き終わったいくつものグラスを背後の食器棚に並べていく。ひとつひとつ丁寧^{ていねい}に、列を作るように。最後のひとつまでしっかりと並べ終えるころには、意識はもう次のことへ向かっている。

僕はカウンターの上に畳んで置いていた黒いエプロンを取り、腰に巻いて紐をきゅつと

結んだ。すでに開店準備は終わっていた。

カウンターを出てから、もう一度、店内を歩いて回る。ゴミが落ちていないか、椅子の並びが不揃いになっていないか、テーブルは汚れていないかをチェックする。

元々は酒場だったので、店内はそれなりに広い。カウンター席が十席、四人掛けのテーブルが四つと、二人掛けのテーブルが三つ。それでもまだ、スペースは余っている。従業員は僕ひとりだ。それで営業できるのかというと、できるのだ。なぜなら、そんなにお客さんが来ないから。

見回りを終えて、僕はそのまま店の外へ出る。

呆れるほどに晴れた空には気まぐれにいくつか雲が浮かんでいる。大通りから一本、裏道に入ったところにこの店はあった。それでも、店の前には多くの人が歩いているし、大通りの喧騒もここまで届く。

くすんだ銀色の鎧を着た、熊の顔をした人が通り過ぎる。その後ろにはびつくりするくらい美人で、耳が長く伸びている人。真っ黒なローブを地面に引きずりながら歩く小人もいる。枚挙に暇がないほど、そんな人たちが溢れている。

さすがにもう慣れたとはいえ、僕は未だに、これは本当に夢じゃないのかと思うことがある。

まさにファンタジー。

ここが異世界だからと言えば説明は簡単だが、それで納得できるかと言えば話はべつだ。ここはどこだと聞きたいし、帰り道はどこかと叫びたい。しかし、真面目に取り合ってくれる人がいるわけもない。僕から見ればいくらファンタジーであろうと、この世界の人々にとつてはこれこそが現実なのだ。そして、その現実を基準にしても、「僕は異世界から来たんです」と言いまわる人間は、まともではなかった。

僕は腰に手を当て、大きく息を吐く。

今日はいいい天気だ。でもいい天気だからこそ、気が滅入るといふ日もある。

「はあ」

「はあ」

あれ、と思つて、僕は首を傾げた。

確かにため息はついたのだが、重なるようにしてもうひとつ、ため息が聞こえた。僕以外の誰かのため息だ。

ちらりと聞こえた方を見れば、道の端に設置された長椅子に座っていた女の子と視線が合った。

僕と同じ年くらいだろうか。全体的に黒を基調としている服装で、印章の入ったケープ

が特徴的だった。それが街の中心区にある、アーリアル魔術学院の制服ということは知っていた。

僕を見つめるその瞳は、紺碧の空のように鮮やかな色をしていた。後頭部の高い位置で一つ結びにしたその髪色は夕陽のように紅い。

見も知らずの二人が、同時にため息をついて、そして見つめ合うという状況に、僕は対処に困った。とりあえず、客商売で培った自慢の笑顔を見せてみた。にこつ。

少女はびっくりと眉を動かし、会釈を返してくれた。間違いなく不審者だと思われたに違いなかった。

朝からやっちまったなと天を仰いで、僕は首を振った。

いや、いいんだ。仕方ない。今日も元気ががんばろう。

店の前にゴミが落ちてやしないかを軽く見回ってから、ドアの横に掛けている木製の札を取った。この世界の文字で書かれてはいるが、僕にも判別はつく。片面には「本日閉店」で、もう片面は「本日営業中」である。

僕は営業中の方を表にして掛けなおそうと、

「ここ、お店なの？」

横合いから声をかけられて、僕の肩が跳ねた。

長椅子に座っていた女の子が、いつの間にか僕の横に立っていた。僕は驚いてしまったことを笑って誤魔化して、女の子に向き直った。

「もちろん。でも、ただのお店じゃありません」

さよとんとした女の子に、僕は胸を張って言った。

「この世界に一軒だけの、喫茶店です」

「喫茶店？」

そう、この世界には喫茶店という概念がない。文字通り、この世界には僕の店しか存在しないのだ。

「軽食や、飲み物を提供するお店、という感じですかね。あと、コーヒーが自慢です」

「コーヒー？」

女の子の眉間に皺が寄った。聞いたこともないという表情だった。

「コーヒーをご存じない？ それはいけませんね。いま大流行のコーヒーを知らないとは。

是非とも試してください」

「大流行なの？」

「もちろん」

嘘だけで。

「それは、美味しいの？」

「大人の味です」

「ふうん？」

興味はなさそうだった。彼女は紅い髪を揺らしながら、僕の店を見上げた。通りに面した大きな窓から、店内の様子を窺っている。

「ねえ、ここ、テーブルあるわよね？」

やけに親しげにそう訊ねられて、僕はうなずいた。

「あるけど」

「椅子って、座り心地いい？」

「それはもちろん。こだわったからね」

喫茶店にとって椅子は大事な要素だ。ふかふかで、くつろげて、柔らかすぎず、固すぎず。

しかし不思議なことを訊く女の子だな、と思っていると、彼女は眉尻を下げて笑みを浮かべた。紺碧色の瞳が、太陽の光を受けて深い輝きを見せた。

「ここって、自習とかしてもいいの？」

僕はただ、こくこくとうなずいた。こんなに鮮やかな色をする瞳を、僕は初めて見た。

「じゃあ、また来るわね」

あつさりと言いつつ言い残して歩き去っていく彼女の背中を、僕はぼうっと見送った。

朝から素晴らしいものを見た気分だ。思わず、はあっと息が漏れた。ため息ではなかった。今日も一日がんばればそんな気がした。

腰に手を当てて、僕は空を見上げた。

男は単純な生き物だなと、しみじみと思った。可愛い女の子に、とても弱い。

道端で突つ立っていったせいで、通りがかった人とぶつかりそうになった。人通りはだんだんと増えてきていた。籠一杯にリングのような赤い果実を抱えている人。頭に真っ黒な布を巻き、その上に小さな竜のような生き物を乗せている人。手をつないで歩く、大きな一本角の生えた女の子と、馬のような顔をした人。

多種多様、なんて言葉でも表現できない。種族からして違う人々が、この街には住んでいる。しかし、たとえここがファンタジーな異世界であろうと、底なしの迷宮が存在する街であろうと、魔法や巫人が一般的であろうと、わけのわからないほど不思議な人たちが行き交っているように、何も変わらないことがひとつある。

働かざる者、食うべからず。

生きていくためには、働かなければいけないということだ。

だから僕はここで喫茶店をやっている。僕の実家は、祖父の代から続く喫茶店を営んでいた。僕にとって最もなじみがあり、少なからずそのやり方が分かっているのがこの仕事だった。

僕にできるのはこれだけだし、気が滅入ることも多いけれど。こういうのも案外悪くないなど、そう思えることも多いのだ。

可愛い女の子と話もできたしね。

僕は手に持ったままだった札を手の中で無意味にくるくると回してから、改めて掛けなおした。

『本日営業中』

一 「生ハムとチーズのホットサンド、温泉卵を添えて」

「のう、ユウちゃんや。わしはもう働きたくないんじや」

つるつる頭に、白い髭を長く伸ばしたお爺さんが、カウンターに座るなりそう言った。

腕を組み、眼光は鋭く、表情は真剣だった。お爺さんは視線を窓の外へ向ける。通りに面した窓からは、行き交う人々の姿が見えた。空はもう夕暮れ色に染まりつつあった。

「もう、働きたくないんじや……」

しみじみと、繰り返した。

僕はそっと息を吐いた。なにしろこの爺さんは毎日こうなのだ。朝昼夜と時間にかかわらずふらつとやって来ては、椅子に座り込んで訳の分からないことを言っただけで帰っていく。

僕はこの人のことをゴル爺と呼んでいる。どんな仕事をしているのかは分からない。けれど、いつも身に着けているまるで和服のようなその仕立ては良いように思えるし、何かしら責任のある立場の人なのだろうと思っっている。

「また逃げてきたんですか」

磨ひいていた皿を置いて訊いてみると、ゴル爺はぐるんと首を回して僕を見た。

「逃げたんじゃないわい。ちよつと息いき抜きをしに来ただけじゃ」

「もう二時間くらい経たちますけど」

「はて、何のことやら。この歳ととになると物忘れが激しくてな……」

「都合の良い時だけ痴ち呆ほう老人になるのやめませんか」

「ひよっひよっひよっ」

奇怪きかいな笑い声をあげて、ゴル爺はカウンターに頬杖ほおづえをついた。完全にくつろぐ体勢たいせいだつた。

ちよつとした息抜きにやって来て、時間を忘れてゆっくりする。喫茶店とはそういうものなので、僕はもちろん何も言わない。うちの店をくつろぎの場所としてもらえることは嬉しいことでもあった。それだけ、居心地が良いということだからだ。

「相変わらず客がおらんのを」

店内を見回し、ゴル爺が言った。

カウンターに座るゴル爺以外では、窓際まじまじのテーブル席に座って本を読んでいるエルフのお姉さんしかいない。暇ひまな時間帯だから、という言い訳ができればよかったのだが、うちの店はいつもこんな感じだった。

「やはり、このコーヒーというのが良くないと思うんじゃが、ユウちゃんよ」

目の前に置いてあったコーヒーカップから一口を飲み、ゴル爺は顔をしかめた。

「相変わらず身に染しみる味じゃのう」

「ちゃんと味わってください。コクとか酸味を」

「香かほりは良いんじゃが、苦すぎるわい。それにわしは甘党あまごうなんじゃ」

そして、カウンターの上に置いてある小ぶりの白壺びやくを引き寄せ、中に入っている茶色い粉をどっさりとしてコーヒーに入れていく。それはもちろん砂糖だった。

お客さんに提供している以上、美味あじしく飲んでもらえればそれに越こしたことはないが、さすがに埋うめ立てるやうにどっさりと投入されると、ため息もでてくる。

この世界に来て驚いたことは山のようにある。そのひとつが、コーヒーを楽しむ文化が存在しないことだった。コーヒー豆は存在しているのだが、それは嗜好品しこうひんとしてのものではなく、眠気覚ましや気付け用の薬の実というジャンルになっていた。

この喫茶店を始めた当初は、コーヒーという真新しい飲料の魅力みりょくで大人気になるに違ちがいなく、思おもったのだが、その発想は山盛りの砂糖よりも甘かった。ひたすらに黒く、苦く、見慣れない飲み物であるコーヒーの評判は、まったく良くない。そもそもこの世界の人々にとっては、苦いものは体に良くない、なんなら毒薬どくやくの類たぐいという意識があるらしく、コー

ヒーの良さを理解してくれる人はほとんどいない。

となると、コーヒーという黒くて苦いお湯を出す、喫茶店とかいうわけのわからない店という評判が立ってしまうのも、当然というものだった。

「ああ、暇じゃのう」

天井からさがる灯りを見上げ、しみじみとゴル爺が言った。

「暇なら働けば良いと思いますけど」

「何を言っとるんじゃ。わしは今、暇であることを楽しんでおるのじゃよ」

「暇だから楽しいことが起きてほしいとか、そういうわけじゃないんですね」

僕が言うと、ゴル爺は僕に笑ってみせた。

「そういう時は自分で見つけることにしておる。待つよりも探しに行った方が手っ取り早い」

それは確かに、と僕は頷いた。しかしそれを実行できる行動力を持っている人は、なかなかいないものである。

ゴル爺がリズムよく「暇じゃのう」を繰り返していると、カランコロンと甲高い音色が響いた。客の来店が分かりやすいようにドアに取り付けたベルの音だ。

視線を向けると、おずおずと顔だけを見せるように覗き込む女の子がいた。紅い髪が肩

からさらりと流れていて、店内を見回す瞳の色は紺碧だ。今朝、開店前に会話を交わした女の子だった。また来ると言ってくれたのは社交辞令ではなかったらしい。まさかその日の夕方に来てくれるとは思ってもみなかった。

「いらっしやいませ」

僕は笑顔で彼女に声をかけた。

「あ、うん。いま、大丈夫？」

彼女が控えめに言った。僕は頷いて、手で入店を促した。

「いくらでもどうぞ。ご覧の通り、今日は空いてるんだ」

「昨日も一昨日もがらがらじゃったがの」

余計な事を言うゴル爺を睨み付けるが、どこ吹く風で口笛まで吹いている。

安全かどうかを確かめるようにゆっくりと入店してきた女の子は、朝と同じく学院の制服を着ている。紅く長い髪を後頭部で一つ結びにしている、大きめの学生鞆を手にしていた。

彼女はテーブルには向かわず、カウンターに歩いてきた。

「お客さん少ないから、もう店じまいしたのかと思った」

「痛いところを突くね」

確かに店内はがらんとしている。初めての来店だためらう雰囲気であるかもしれない。「酒場じゃなくて、喫茶店だつたわよね？」

「そう、喫茶店じゃよ、お嬢さん。コーヒーが自慢のな」

ゴル爺がコーヒーカップを掲げ、ぱちりとウインクをする。女の子は初対面から馴れ馴れしいゴル爺に戸惑いつつ、ぺこりと会釈を返した。

「喫茶店もコーヒーも、初めて聞きました」

「そうじゃろう、そうじゃろう。わしだつてこの店で初めて知つたわい。ささ、とりあえず座りなさい」

「いえ、あの」

「まあまあまあ、少しだけ少しだけ」

「はあ……」

ゴル爺のペースに巻き込まれて、女の子は隣の椅子へ座らされてしまった。助けるべきか悩んだけれど、もう少し様子を見ることにした。

女の子の前におしほりとお冷を出すと、すかさずゴル爺が僕に言う。

「ユウちゃんや、この子にコーヒーをひとつ」

「あ、いえ、私は」

「もちろん払いはわしが持つでの、心配いらん。代わりに名前を覚えてもらえんかの。わしはゴル爺と呼ばれておる」

「ええと、リナリアです」

「リナリアちゃんか！ カンピウス雪原の奥地に咲く、春の訪れと希望を司る花じゃな。

良い名前じゃのう。出身はあっちの方か？」

と、呆れるほどの手際の良さで、ゴル爺はリナリアと名乗った女の子と話し込んでいた。なんとという行動力と口のうまさだろう。

僕はカウンターの中にしゃがみ込み、棚の中から小ぶりの白壺を取り出す。中にはコーヒー豆が入っている。コーヒーミルの蓋を開け、壺から一杯分の豆をとって投入する。それからミルに取っ手を差し込み、ゆっくりと回していく。

ごりごり。がりがり。

コーヒー豆が粉にされていく音が店内に響く。

ミルは良い。コーヒー豆を砕くこの時間は至福だ。全てのことを忘れさせてくれる。一杯分の至福を味わった後はサイフォンの準備だ。

専用の台に取り付けてある球状のフラスコは透き通ったガラス製で、下に加熱するためランプが置けるようになっていて。その上には、フラスコに差し込めるようにピーカー

の底面から細い筒が伸びたような形をしたロートがある。こちらもガラス製だ。

この機材はもともと、この世界の薬剤師や研究者たちが使うためのものだった。それをコーヒー用に改造してもらった特注品である。そのため、コーヒーを淹れるには物々しく、迫力を感じさせた。

僕はフラスコに、白銀のケトルからお湯を注ぐ。このケトルは魔法技術が応用された製品で、取り付けられた魔石に魔力が込められている限り、常にお湯が沸いた状態になるという素晴らしいアイテムだ。

お湯を注いだあとは、フラスコの周囲を乾いた布で丁寧に拭く。フラスコに水滴が付いたまま加熱すると、割れてしまうことがある。ガラス製品はただでさえ高価なので、扱いは慎重にしなければならない。

お湯の入ったフラスコの下に、加熱用の魔法ランプを設置して点火する。このランプの中に火の魔法が込められているのか、それとも熱を発する石でもあるのか分からないのだが、つまみをひねるとランプの中心が赤く光り、そこに熱が生まれるのだ。

魔法という文化が浸透しているファンタジー世界だが、利便性を求めた結果として生まれる製品は、僕の世界とあまり変わらないことが不思議でもあり、面白くもあった。なにを燃料としているか、どんな技術で作られているかにかかわらず、結局のところ「お湯を

わかす」「火をともし」という目的は同じなのだ。

ロートの中に布製のフィルターを差し込んでから、コーヒーミルによって粉末となったコーヒー豆をロートの中に入れる。お湯が沸騰するのを待って、フラスコの口にロートから伸びた筒をぐつと押し込んだ。

「わ……」

リナリアが小さく声を上げた。

フラスコ内のお湯が、自然と上がってきたからだ。差し込まれた管を通じてさらに上昇していき、ついにはロート内に移動する。

「なに、これ。魔術?」

リナリアにきよとんとした顔で訊ねられて、僕は笑ってしまふ。

「ちよつと、笑わないで。魔術じゃないの?」

「違ふよ」

ロートの中に上昇したお湯は、コーヒーの粉が浮くほどになっていた。完全に上がりきってしまった前に、小さな木べらでぐるぐる回ると円を描くように数回、混ぜる。お湯とコーヒーの粉を攪拌してなじませるためだ。

ロートの中で泡と、浮かんでいるコーヒーの粉と、抽出されたコーヒーの三層が出来上

がる。それから、湯気と共にわきあがるコーヒーの豊かな香り。抽出している瞬間だけ楽しむことのできる、穏やかで、ゆるやかな時間だ。

お湯がしつかりとロートに移ったのを確かめてから、少し火を弱める。フラスコの底面に残った少しのお湯が、こぼこぼと泡を生み出している。

ふと気づくと、ゴルフとリナリアの会話は止まっていて、二人ともじつとサイフォンを見つめていた。二人揃って真剣な顔をしているものだから、思わず笑ってしまう。

リナリアがじろりと僕を睨んだ。

「ごめんごめん。一生懸命、見てるものだから、ついおかしくて」

僕が言うと、リナリアは唇をつんと尖らせた。

「仕方ないでしょ、こんなの初めて見たんだもの。魔術じゃないなら、なんでお湯が上がっていくの？」

「ええと、温められたお湯で圧力が変化するから、だったかな」

「圧力？ なにそれ」

僕は腕を組んで天井を見上げた。

「お湯を温めると、フラスコの中の水蒸気が膨らむんだ。フラスコの中に逃げ場場所はないから、中のお湯は押し上げられていくわけ」

ロートの中の様子を見ながら、完全に火を消す。もう一度、木べらでロートの中を攪拌する。

「だから、こうしてランプを消すと膨張していた水蒸気が元に戻るんだ。すると」

少しの間があつて、ロートで抽出されたコーヒーが管を通り、ゆっくりとフラスコに降りてくる。

「わっ、わっ」

最初はお湯だったものが、深い琥珀色になって再びフラスコを満たしていく。ゴルフはリナリアを優しい微笑みを浮かべて見守っていた。孫娘でも見ている気分なのだろう。

やがて、ロートにはお湯と空気を吸い込んでぷくりと膨らんだコーヒーの粉だけが残る。これこそが上手く抽出できたことを示す証なのだ。

僕はロートを取り外した。台に取り付けてある取っ手を持ち、フラスコからカップにコーヒーを注ぐ。カップから立ち上る湯気と、鼻から頭のとっぺんまでを突き抜けるような芳醇なコーヒーの香りが店内に満ちた。この香りもまた至福だ。コーヒーを淹れるという工程には至福が溢れている。

「いい匂い」

うっとりとしたリナリアの声に、僕は思わず笑みを浮かべる。カップをソーサーにのせ

て、リナリアの前に置いた。

「どうぞ、これがコーヒー。僕のオリジナルブレンド」

リナリアは両手でそれを持ち上げ、黒々とした宝石を前にした誰だれもがそうするように、コーヒーの水面をじっと眺ながめた。

「いただきます」

そして一口。リナリアは眉まゆを上げるようにして目を見開いた。それから僕を見る。口からカップを離して、ぽかんとした顔は幼い子供のようだった。

「……すっごく、まずい」

ゴル爺が声をあげて笑い、僕はがっくりと肩を落とした。

二人は思ったよりも打ち解けているようで、ずいぶんと会話がはずんでいた。と言っても、ゴル爺がいろいろと話しかけ、リナリアがそれに答えているだけなだけけど。

おかげで、僕はリナリアについているいろいろなことを知った。

学院では成績優秀ゆうしゅうであり、昨年度は学年首席になったこと。おかげで貴族の生徒から注目されてしまい、学院では肩身かたみが狭せまい思いをしているということ。魔術師学科で、近々、



迷宮での実習があるということ。少しぬるめの紅茶が好きだということ。

時々はその会話に僕も参加したが、ほとんど聞いているだけだった。

やがて窓から見える辺りの景色がすっかりと暗くなりはじめ、店の看板に明かりを灯すために外に出る。そこで初めて、店の表の端っこに人が立っていることに気づいた。その女性は、べこりと僕に頭を下げた。

「お世話になっております」

「えっと、いつからここに？」

訊ねると、彼女は懐から懐中時計を取り出し、時間を確認した。銀色の髪が首元でざらりと揺れた。

「一時間ほどでしょうか」

予想以上に長い時間だったものだから、僕は言葉を失う。中で待っていればよかったのに。そんな僕の表情を見て、彼女はくすりと笑った。

「ずいぶんと、楽しんでいらっしやるようだったの」

真っ白なシャツに、落ち着いた色のパンツスーツのような服装をした彼女は、なんとゴル爺の秘書さんなのだ。仕事を抜け出してここにやってくるゴル爺を、こうしていつも迎えに来るのだった。

「たしかに楽しんではいまずけど、大丈夫ですか、時間」

「そうですね、そろそろお戻りになって頂きたくはあります」

「また、途中で抜け出したんですか？」

「はい、途中も途中で。今からしっかりと働いて頂かないといけません」

意味もなく声を潜めて、こっそりと聞いてみると、秘書さんもまた声を潜めて答えてくれる。見た目は冷たい美貌をした大人の女性なのだが、意外とノリの良い人だった。

「よく一時間も待ってましたね」

「本日は夜のお時間が空いておりましたので。あの方は適度に息抜きをしないといと、ある日、突然に本気で逃げ出してしまいますから。これも仕事の一環でございます」

さすが秘書さんだった。ゴル爺の扱い方をよくわかっている。僕は深く感心した。

「それじゃあ、ゴル爺を呼んできますね」

「お手数をおかけしますが、よろしく願います」

ものすごく丁寧に頭を下げられて、僕の方が恐縮するほどだった。秘書さんとはとにかく綺麗で大人な女性なのだ。僕は秘書さんと会話をするたびにドキドキである。あといい匂いがする。

やっぱり美人のお姉さんはいいなあと、しみじみ思いながら店内に戻った。カウンター

ではゴル爺がその上に突っ伏し、実にわざとらしく咳き込んでいた。リナリアが僕に向け
てばたばたと手を上下させた。

「ちょ、ちよつと、あの、このお爺さんが」

「ごほつ、ごほつ……なあに、心配はいらん。ちよつと古傷がの……」
何の古傷だ。

「だ、大丈夫ですか」

心配そうな顔のリナリアを見て、ゴル爺はますます咳を激しくさせた。

「すまんが、背中を撫でてくれんか……できるだけ優しくの」

「背中？ 背中を撫でればいいの？」

わたわたとしたリナリアが本当にゴル爺の背中に手を伸ばそうとするので、僕はすかさ
ずエロ爺の後頭部をスパーンと叩いた。髪というクッション材がないものだから、爽快な
音が鳴った。

「あいたーっ！」

「はいはい、ゴル爺さんも三文芝居はほどほどにしてくださいね」

戸惑うリナリアが僕とゴル爺を交互に見た。ゴル爺は頭をさすりながら唇を尖らし、ち
えーっなんて拗ねていた。

「古い先も短いじゃから、少しくらい良い思いさせてもらってもばちは当たらんじゃ
ろ」

「うちの店では遠慮してください。短い古い先をさらに短縮させますよ」

「あれ？ わし、もしかして脅されてない？」

「気のせいです。それと、店の前で秘書さんが待っています」

僕が言うと、ゴル爺は言葉では表現できないほど複雑な顔をしてみせた。

「そんな顔をしてダメです。早く働いてください」

「いやじゃ……わしはもつとここに居るんじゃ……リナリアちゃんと遊ぶんじゃ……」

いやじゃ、いやじゃと、ゴル爺がカウンターをばしばし叩くものだから、僕はそつとキ
ツチンに置いてある肉切り包丁を手を取った。これが一番大きく、刀身が厚いのだ。

「やや！ なんだかとても仕事が出来たのう！ こんなしけた店でぐーたら
しとる場合じゃなかったわい！」

ゴル爺の切り替えの早さは目を瞠るほどで、すくつと立ち上がると乱れた服を正した。
それから隣のリナリアに向き直る。

「今日はありがとう、リナリアちゃんや。じじいの暇つぶしに付き合ってくれたおかげで
楽しかったわい。お札にこの扱いは持つてな、好きなものを食べなさい。まあ、大した

ものもないんじゃが」

「それ、僕の前でよく言えますね」

肉切り包丁を明かりに反射させて威嚇する。

「おお怖い！ 墓場に叩き込まれる前にわしはお暇することにしようかの。じゃあの、ユウちゃん、支払いはツケで頼むぞい」

終始、ばかんとした表情で僕とゴル爺のやり取りを見ていたリナリアを残して、ゴル爺はさっさと帰っていった。

肉切り包丁を元の場所に戻して、ゴル爺が食って飲んでいった食器やらを片づけていると、リナリアがおずおずと僕に言う。

「あの人、いつもあんな感じなの？」

「いつもあんな感じだね。変な人なんだ。深く考えない方がよい」

はあ、と頷いて、リナリアはしばし、ゴル爺が出ていったドアを見ていた。

僕が食器を洗っていると、我に戻ったリナリアは本来の目的を思い出したようだった。椅子に座りなおして鞆の中から分厚い本を取り出し、それを読み始めた。本は深みのある茶色で、表紙は革張りのようだ。僕には読めない不思議な文字が並んでいて、魔方阵と呼ぶのがしっくりくる図形が描かれていた。そのあまりの魔法書つぷりに、僕は感動した。

ゴル爺のせいですっかり忘れていたが、彼女はもともと、自習できる場所を探してこの店にやってきたのだった。

ゴル爺がいなくなると、店内はずいぶん静かになった。大通りの喧騒が遠くに聞こえる。

ふと子供のころの、夏祭りの日を思い出した。

両親が忙しいことを知っていた僕は、祭りに行きたいというわがままを言えなかった。部屋の中にいると、窓の外から、太鼓を叩く音が聞こえた。絶え間ない人のざわめきと、やがて打ち上がる花火の音。それを見ようと、近所の人たちが家を出て歩いていく時の話し声。窓際に座り込んで耳をすましながら、祭りとは、そこに行き交う人々を想像する。それが僕の夏祭りだった。

この世界では、毎日が夏祭りみたいなものだ。

迷宮を中心として成り立っているこの街は、とかく人が多い。迷宮で一攫千金を狙う冒険者に、迷宮を一目見ようとあちこちから集まる観光客。その観光客を相手にしようと集まってきた行商人。色んな人がこの街にやってくる。

だから大通りはいつも屋台や露店が並び、夜通し明るく、人が絶えることもない。あまりにうるさいものだから、大通り沿いの宿屋ではゆっくり休めやしないほどだ。

けれど、うちの店はこんなに静かだ。

商売としては笑いごとではないのだけれど、それでも笑うしかない。ゴル爺が望外にお金を落としてくれていたので経営を維持できているが、そうじゃなかったら早々に店を畳んでいるところだった。

テーブル席では、エルフのお姉さんが本を開いたまま、ぼんやりと窓の外を眺めている。店の外はすっかり暗くなっていて、窓にはお姉さんの顔が鏡写しになっていた。まるで人形のように、という表現は陳腐だが、そうやってしまっただけに整った顔立ちだった。

カウンターではリナリアが、真剣な顔で本を読みこんでいる。いつの間にか小さな巻紙を広げ、時々、万年筆のようなもので何かを書き取っている。

食器の片づけを終えた僕は、壁掛け時計に目をやる。夕飯にはちょうどいい時間だった。リナリアに声をかけるのもためらわれたので、勝手に準備することにした。

魔法式コンロに火をつけ、小鍋にケトルからお湯を移して火にかける。その間に、戸棚にしまっているパンを取り出す。僕の顔ほどもある大きな丸パンだ。ぱさぱさとしていて、全体的にやや黒く、少し酸味があるのが特徴だ。これを二枚、少し厚めにスライスした。

今度は煉瓦のようなチエダーチーズの塊を取り出し、薄めの二枚を切り出した。

それから生ハムを用意する。プロシュットとも呼ばれる生ハムは、豚の後ろ脚の肉を塩

だけで熟成させたものだ。工程も材料もシンプルで、乾燥させてから燻製にするだけ。必要なのは豚と塩と時間、それと空気、なんて言われるほどだ。

さて、ここで小さな疑問が残る。この世界に豚がいるのかどうかを、僕は知らない。どこで家畜として飼われているのか、迷宮内で狩られた猪的なものなのか。あるいはまったく違うけれど、肉は豚のような味のある生き物がいるのかもしれない。

この生ハムは赤みが強く、身の周りには脂がしっかりとついている。味は驚くほど濃厚なのに、臭みは少ない。豚肉よりは固めなように思うから、分類的には猪肉に近いだろうか。

お湯が沸騰したら火を止め、少しの水を入れて温度を調整した。それから卵をひとつ、ゆっくりとそこに入浴させた。

今度は隣のコンロに鉄製の平たいフライパンを置き、火にかける。全体が温まったところにバターを溶かして、スライスした丸パンを置いた。焼き色がついてきたらひっくり返して、チーズと生ハムをのせて、もう一枚のパンで挟んだ。

生ハムが充分な塩味を持っているし、チーズも濃厚な風味を出してくれる。他に調味料はいらない。必要なのは生ハムとチーズと時間、それと空気ってやつだ。

パンの上に清潔な布巾をかぶせる。小ぶりの鍋を取り出して、底でぐっと押さえつけた。

パンの底がじゅうじゅうと、胃袋を刺激する音色をあげる。

そのまま待っていると、ふっと、パン生地しじの香かはしさが鼻をくすぐる。それがひっくり返す合図だ。

パンを押さえていた鍋を離し、布巾を取ると、閉じ込められていた香りが一気に広がった。パンは平べったくなっていて、パンの間から黄色いチーズがとろりと溶けだしていた。木べらでひっくり返すとパンの裏面にはこんがり焼き色がついていて、それは額に入かきれて飾かりたいほどの美しさだった。

もう一面にも同じように焼き色をつければ、ホットサンドの完成だ。

それを皿に移して、仕上げにお湯から救出した卵を割った。殻からの中から少し固めの温泉卵が顔を出し、こんがり色づいたベッドの上に横たわる。完璧だ。自分に惚れ惚れほれしてしまう。

自慢の一品を持ってリナリアのもとへ向かう。集中して勉強していると思ったのだけけど、いつの間にか、彼女は僕の方を見ていた。どうやら、料理をしているところを観察されていたらしい。

「ちょうどよかった。これ、良かったら食べて」

「私に？ いいの？」

「もちろん。食べてくれないと困る。出来立てが一番おいしいんだ」

リナリアの前に皿を置いて、ナイフとフォークを添えた。

「お代はゴル爺持ちだし、お代わりもご自由どうぞ」

「ありがとう。お腹、空いてたの。でもこれ……なに？」

リナリアは首を傾げた。

「生ハムとチーズのホットサンド、温泉卵を添えて」

「ホットサンド？」

「食べてみたら分かるよ」

言って、僕は調理器具の片づけに戻る。できれば目の前で食べているところをじっと見つめ、味の感想やら改善点を詳しく訊きたいくらいなのだが、もちろんそんなことはしない。横目でちらちらと観察する程度だ。

ナイフとフォークを握にぎったリナリアが、初めて見たであろうホットサンドの前に、その食べ方に戸惑っているようだった。それでもおずおずと手を動かし、目を輝かせた。ホットサンドにナイフを入れた瞬間に、熱あつで柔らかくなったチーズがマグマのようにあふれ出したのだらう。とろとろに溶けて糸を引くチーズは、人の心を幸せにする存在なのだ。

切り分けたホットサンドをフォークに突き刺して、一口食べたリナリアの表情が途端に

笑顔えがほになって、僕はそれだけでご機嫌きげんだ。

鼻歌なんか歌いながら調理器具を片づけていると、テーブル席に座っていたエルフのお姉さんが、僕に向かって手招きをしている。

カウンターを出てそちらに向かうと、どこかぼんやりとした表情で見つめられた。耳に掛けられた長い髪かみが妙みょうに色いろっぽかった。

「あれ」

と、お姉さんがリナリアを指さして言った。この人の声を初めて聞いた。そしてあまりに透すき通った声に驚いた。本当に妖精ようせいとか、そういう存在なのかもしれない。

「ああ、ホットサンドですか。作りましょうか？」

「お肉、入ってる？」

「はい。生ハムが」

エルフのお姉さんはゆっくりと首を振ふった。

「お肉は、食べられない」

表情はほとんど変わっていないけれど、瞳ひとみだけは悲しそうな色を宿していた。僕の心臓はぎゅっとなった。こんな美しいお姉さんに悲しい顔をさせるなんて！

「卵とかチーズは大丈夫だいじょうぶですか？」

僕は力強く訊ねた。お姉さんはこくりと頷いた。

「それなら、お肉お肉抜きぬきで作りますね」

「うん」

幼子のようにしっかりと頷かれて、僕は思わず笑ってしまった。

ホットサンドをもう一枚おかわりしてから食事を終えたリナリアは、それからもう少し自習じじゆをしていた。

特製の目玉焼きホットサンドを平らげたエルフのお姉さんもすでに帰ってしまったので、店内には二人きりだった。

僕が洗い終えた食器を磨みがいていると、荷物を片づけたリナリアが立ち上がった。

「寮りょうの門限かどかぎもあるし、そろそろ帰るわね」

「そっか。お疲れさま」

リナリアは頷いて、そのまま少し時間が空いた。何かを言おうとしているようだった。僕は何も言わず、ゆったりと待っていた。

「ねえ」

少し伏せられた視線のまま、リナリアが言った。店内の明かりに、深い紺碧の瞳が鮮やかに見えた。

「このお店、どれも高いの?」

どれも、というのは、きつとコーヒーの値段を基準にしているのだろう。

「コーヒーは高いけど、普通のメニューもちゃんとあるよ」

リナリアはほっとした顔を見せた。

「また来ても良い? その、あんまり、お金はないんだけど」

「もちろん大歓迎だよ」

僕は両手を広げて店内を示した。

「ご覧のとおり、いつでもお客さんを待っているんだ」

「そ。なら、よかった」

リナリアがくすりと笑ってくれたので、僕も笑みを返した。

「いつでも何時間でもどうぞ。何なら、お冷だけでもいいくらいだよ」

「ちゃんと注文はするわよ。さっきの料理も、また食べたいし」リナリアは鞆を持ち上げた。「ちゃんと自己紹介、してなかったわよね。私、リナリア。リナリア・リーフォント。名前を訊いてもいい?」

「ユウだよ。ユウ・クロサワ。よろしく」

「うん。よろしく」

それじゃあまた、と言い残して、リナリアはドアの向こうに去っていった。ドアベルの音が鳴り響いて、それもやがて静かになると、店内はしんと冷たくなった。

誰もいなくなった店内は、どこか素っ気ない。

意味もなく鼻歌を歌いながら、僕は店じまいを始めた。